

E7 東京下町老人の人間関係——別居子と反人の比較を中心に——  
お茶の水女大家政 の前田尚子 湯沢雍彦

〔目的〕 これまで老人は同居家族との関連において論じられることが多かった。しかし年金制度の整備により、少くとも経済的には独立して生活しうる老人は増えてきており、事実老人のみ世帯の占める割合は年々増加している。そこで、今後は老人とより広い人間関係の中に存在する個人として把握する視座が必要とらるであろう。本研究においては、老人の世帯外の人間関係のうち、別居子と反人に焦点をあて、両者を比較することにより、それぞれが老人の生活においてどのような役割を果たしているかを考察する。

〔方法〕 東京都葛飾区鎌倉在住の65歳以上の男女のうち、子どもと同居している有配偶のもの70名、夫婦のみで暮らしているもの72名、計142名を抽出し、調査票による個別訪問面接調査と実施した。有効票数113票、回収率は79.6%である。調査実施年月日は、昭和61年7月14日、15日。

〔結果〕 ①90%のものが別居子をもっているのに対し、反人をもっているものは、66%である。②反人と知りあつたきっかけは、地縁によるものがもっとも多く、50%を占める。③反人の年齢は70代がもっとも多く、59歳以下の反人は17%にすぎない。④別居子と反人の数までの所要時間を比べると、反人の方が近くに居住しており、会う頻度も反人の方が多い。⑤経済的援助、病発時の世話をいづれ別居子の方がより機能しているが、余暇活動、悩み相談においては反人の方が機能している。